

## *Treasure Island* における反体制への挑戦 逸脱する英雄像

水間 千恵

I

Robert Louis Stevenson の *Treasure Island* (1883, 以下『宝島』)の主たる語り手は、Jim Hawkins である。<sup>1</sup> ジムは身分も低く特別な才能もない子どもであるが、右往左往する大人達を尻目に自由奔放に振舞い、宝の獲得に重要な役割を果たす。この意味で『宝島』は、強烈な個性と主体性を主張する少年の冒険談としての性質を前面に打出している。しかし、入手した様々な成果(地図、情報、船)を悉く大人の手任せに委ねざるをえず、独力で目的を遂行するに至らないという点において、冒険の主人公としての彼の主体性はきわめて限定されたものだと言わざるをえない。<sup>2</sup>

そもそも、英雄を描くことを主題とする冒険小説において、能力の点で大人に劣る子どもを主人公とすれば種々の不利益が生じることは避けがたい。そのような不利益の回避手段について、Margery Fisher は次のように述べている。

The *young hero* [. . .] has been introduced into adventure stories through a number of compromises by which the disadvantages of physical and emotional immaturity have been avoided or disguised. One of these compromises the dual hero, an adult matched with a young person; two share the action, each offering the talents proper to his age, and the younger character attracts from the older the aura of a 'hero'. (212 italicized in the text)

実際、子ども自身の英雄性を追及するよりも、その周囲をとりまく大人の登場人物の姿を通して英雄像を提示することは、19世紀の少年向け冒険小説における常套手段であった。<sup>3</sup>

このようなジャンルの特徴に基づき、本稿においては、少年主人公の視線を通して示される英雄像を探ることによって、19世紀の冒険小説としての『宝島』がもつ特異性を明らかにしたいと考える。冒険小説の通則から言えば、英雄は

敵を倒して成果を手に帰国する者でなければならない。<sup>4</sup> 従って『宝島』における英雄像の分析にあたっては、宝探し競争の最終的な勝利者を探ることが必要となる。しかし、本稿においてはその前段階として、紳士対海賊という表面的な対立構造の下に隠されている両陣営内部での権力闘争の過程を検討し、そこで提示される様々な男性像の意味を考察していくこととする。

II

『宝島』で展開されるのは、埋められている莫大な財宝をめぐる繰り広げられる地主 Trelawney、医師 Livesey、船長 Smollett を中心とする紳士一派と、Silver に率いられた海賊一味との攻防である。<sup>5</sup> しかし詳細に検討すれば、両陣営とも一枚岩とは言えないことが分かる。

まず海賊一味であるが、実質的な首領シルヴァーの地位は必ずしも安定したものではない。海賊たちの権力交代劇は、皮肉なことに非常に民主的な手続きに則って行なわれている。<sup>6</sup> 部下の総意によって不適格者だとみなされた首領は黒丸を突き付けられてお役御免となるのである。この民主性のためにシルヴァーには階級、職域などによって上下関係が規定される紳士たちよりも、各段に巧妙な立ち回りが求められる。しかも航海の完遂のみならず、宝の横取りもしなくてはならない。目先の利益しか考えない手下達の舵取りに苦心するシルヴァーの様子は度々描かれているが、ここでは、不満を抑えきれないと見てとった彼が、手下に計画変更を告げるせりふを例にとってみよう。

If I had my way, I'd have Cap'n Smollett work us back into the trades at least; then we'd have no blessed miscalculations and a spoonful of water a day. But I know the sort you are. I'll finish with'em at the island, as soon's the blunt's on board, and a pity it is. (60)

ここには、シルヴァーが持つ計画力や知性のみならず、危険をかぎとる才や状況に応じて計画を変更できる柔軟性なども示されている。さらに、物語の後半部で実際に黒丸をつきつけられた時に、彼はもう一つの能力を披露する。手下達が提示した四か条の不適格理由に対して、シルヴァーはおどし、すかしをまじえた大演説を行なって反論し結局巧みな弁舌で手下たちを丸めこむのである(160-61)。このように見れば Humphrey Carpenter による “the portrait of the perfect politician” (108) というシルヴァー評は、まさに的をえたものと言えよう。

シルヴァーは、不安定な立場にありながら優れた状況判断能力と瞬時に善後策をうちだせる柔軟性によって、すなわち抜群の政治的手腕によってその地位を維持しているのである。

しばしば『宝島』における「真の主人公」(Carpenter and Prichard 542)とみなされ、「英雄性を備えた悪漢」(Townsend 44)と評されるシルヴァーであるが、その人物造形は19世紀冒険小説の正統派英雄像とはかけはなれている。もちろん、悪漢ヒーローとしての海賊はそれ以前にも描かれている。Byronの詩*The Corsair* (1814)、Walter Scottの*The Pirates* (1821)やCaptain Marryatの*The Pirates* (1836)などがその代表格といえよう。また、ヴィクトリア朝中期の人気作家R. M. BallantyneやW. H. G. Kingstonなども、これらの初期の作家達の影響を受けて道徳的な海賊ヒーローを多く生み出していた。<sup>7</sup>しかし、これらの作品に登場する海賊は、手ひどい裏切りによって身を持ち崩したとか、失われた高貴な家柄の世継ぎであるとか、いわば犠牲者的な設定が多かった。しかも、イギリス船は襲わないとか人殺しを避けるという信念を持っていたり、最後に罪を悔いて改心するなど、正統派の道徳的英雄ともなにかの接点を維持していたのである。シルヴァーを含めて『宝島』に登場する海賊に、道徳的高潔さがみじんもないのとは対照的である。

そもそも『宝島』における海賊の描写には、Alexsander Exquemelingの*The Buccaneers of America* (1678、英訳は1684)や、Charles Johnsonの*The General History of the Robberies and Murders of the Most Notorious Pyrates* (1724)のような、血なまぐさい行状記の影響が色濃い。<sup>8</sup>実際『宝島』の中でジムが“I never saw men so careless of morrow; hand to mouth is the only word that can describe their way of doing.” (170)と描写する、残虐、放埒かつ先見性のない無法者としての海賊像は、19世紀においても版を重ね続けていたこれらの読み物に加えて、扇情的な新聞記事、裁判記録を記した小冊子、三文雑誌ベニー・ドレッドフルなどを通じて、大衆の間では既に形成されていたものとも言える。そして、そのような海賊像の中に大衆は犯罪者に対する敵意というよりも、むしろ異国的、浪漫的雰囲気へのあこがれを投影していたのである。<sup>9</sup>

さらに、『宝島』の海賊たちに冠せられる“Buccaneer” (18)という呼称には特殊な含意がある。本来17世紀末の新大陸において、主にスペインの利権を略奪の対象とした彼らは、イギリスの国益の擁護者として賛美されていたが、歴史的には、自国の商船を襲ったpirateとは区別されるべき存在である。しか

し、20世紀初頭までに、大衆の想像力の中で両者の融合が進み、単なる犯罪者としての pirate にも国民的英雄のイメージが奇妙に混入していたという。<sup>10</sup> もちろんシルヴァーに国益の擁護者としてのイメージは重ねようがない。<sup>11</sup> しかし同時に、貯蓄に励み、地位の向上を目指すという生き様や、巧みな話術や先見性という資質において、シルヴァーは悪漢ヒーローとしての伝統的海賊像からも逸脱した存在なのである。彼は自らの特異性を次のように説明している。

They [other pirates] lives rough, and they risk swinging, but they eat and drink like fighting-cocks, and when a cruise is done, why, it's hundreds of pound instead of hundreds of farthings in their pockets. Now, the most goes for rum and a good thing, and to sea again in their shirts. But that's not the course I say. I puts it all away, some here, some there, and none too much anywheres, by reason of suspicion. I'm fifty, mark you; once back from this cruise, I set up gentlemen in earnest. (58)

このように、知性、雄弁さ、野心、貯蓄に励む勤勉さなどの点において、彼は手下達のような単なる無法者としての海賊とは区別される。しかし、その残虐さや無慈悲さゆえに、道徳的な英雄的海賊にもなりえない。そして、そのようなシルヴァーを “The formidable seafaring man with one leg [. . .] met his old negress, and perhaps still lives in comfort with her and Captain Flint. It is to be hoped so [. . .].” (190) と思い出すジムの言葉から読み取れるのは、敵意というよりは、むしろある種の愛情と敬意なのである。

### III

ヴィクトリア朝のイギリスにおいて、少年達に理想化された男性像、すなわち英雄のイメージを提示し、帝国の建設者の育成に寄与したのは文学のみではない。少年たちの目指すべきモデルとしての男らしさの概念は、パブリック・スクール改革に始まり、ボーイスカウト運動の創始に至る、青少年の規格化の流れと密接な関係がある。<sup>12</sup> 当初はキリスト教精神にそった厳格で高貴な道徳観をもつ青少年の養成機関として再出発したパブリック・スクールは、やがてスポーツの奨励を通じて、精神から身体にまでその管理、統制の対象を広げ、1880年頃までには軍隊的性質を全面に打ちだすに至っていた。<sup>13</sup> この変化は、Thomas Hughes が *Tom Brown's Schooldays* (1857) で描いたアーノルド時代のラ

グビー校と、Rudyard Kipling の *Stalky & Co.* (1899) に登場する軍人養成機関としての寄宿学校とを比べてみてもよく分かる。キプリングの描いた学校の特殊性を考慮するにしても、<sup>14</sup> 両作品の違いが、パブリック・スクールが少年達に提示した理想的男性性の変化を反映するものであったことに異論の余地はない。<sup>15</sup> いずれにせよ、学校は現実でも文学上でも中産階級の子弟の規格化に関して重要な役割を果たしていたのである。

ヴィクトリア朝中期から後期にかけての冒険小説において同様の役割を果たしていたのが、バランティンやキングストンなどに代表される人気作家達である。<sup>16</sup> 騎士道精神、信仰心、愛国心、自律性、勇猛さ、健やかで美しい肉体など、彼らが提示した理想的男性性は、その作品が 19 世紀末の少年文化に大きな影響を与えた *Boy's Own Paper* などの雑誌にも積極的に掲載されたこともあって、学校という場に拘束されることなく広く放射され続けた。この種の雑誌の中心購読層は当初こそ裕福な中産階級の子弟であったが、時代を経て雑誌が多様化し、購読層が拡大していくと、バランティン達が描いた男性像は下層中産階級へ、ひいては労働者階級へも浸透していくことになる。<sup>17</sup> 軍事的な基本精神を持ち、しかも安上がりな青少年の訓練組織として広く大衆に受け入れられたボーイスカウト団の創設は、このような一連の流れの仕上げ段階といえる。<sup>18</sup> こうして規格化された青少年の理想がヴィクトリア朝後期に至って、インドで劇的な死をとげた Henry Havelock 将軍や、暗黒大陸に文明の叡智をもたらした探検家 David Livingstone などに集約されるのは当然の帰結であろう。『宝島』が出版されたのは、このような帝国への寄与者に対する英雄崇拜が色濃い時代だったのである。

#### IV

では、『宝島』で描かれる「紳士」たちと当時理想化されていた男性性とはどのような関係にあるのだろうか。“the three gentlemen” (64) と一括される地主、船長、医師の 3 人であるが、彼らも海賊たちと同様一枚岩ではない。ストーリーにおける 3 人の動きを追っていくと、そこには内部抗争的な権力争いの構図が見えてくる。

まず物語の最初に強い支配力を誇示するのは、船主であり宝探しの主催者たるトレローニである。彼の権力基盤は、地主 (Squire) という肩書きが示すとおり、おもに土地所有に基づく財力にあり、そのことはジムが目にする広大な屋

敷の様子に端的に示されている。また、トレローニが持つ権力のイメージを補強するため、身体的特徴もタフガイとしての面が強調される。すなわち、彼は身長 180 センチ以上、横幅もそれ相応という巨漢で、顔は生来のいかつさに加えて、冒険家らしい日焼けとたくましさを備えている。さらに彼は、18 世紀前半にアメリカ大陸沿岸を荒らしまわった海賊への称賛を公然と口にする。これらに象徴されるように、トレローニは肉体的強靭さを誇る明朗快活な愛国者であって、バラントインなどが描いた英雄像にも合致する。

しかし、ジムの眼差しは宝の地図の話に興奮してパイプを折ったり、他人の話の聞かずに一方的にしゃべり続けるトレローニの様子に注がれ、その短気さや自己中心性を浮きぼりにする。旅の手配も迅速であるとはいえ、綿密な計画性はない。実際、海軍士官の服を着こんで悦に入ってみたり、大事な秘密を誰にでも話してしまったりと、彼の軽拳妄動ぶりが次々と列挙される。ジムの評価も “he was so loose a talker.” (49) と、いたって辛口だ。つまりトレローニの英雄性は、ジムの視線によって損なわれているのである。そして、実際には、洋上に出ると地主は指揮権を船長に委ねざるを得ず、権力の一部をなす召使を次々と失い、ついには負傷者の付添夫としての位置に押し込められることになる。結局のところ、宝探しの旅はトレローニの権力が、彼自身の能力に負うものではないことを露呈させたにすぎないと言えよう。

旅の過程でトレローニに代わって主導権を握るのは、彼が敵視していたスモレットである。トレローニと同じく体格に恵まれている彼は、理知的で、慎重で、秩序を重んじる人物である。当然地主は彼のことを嫌い、当初からその行動を “unmanly, unsailorly, and downright un-English.” (50) と、こきおろしていた。しかし、水夫反乱を機にトレローニが権威を失うと、スモレットは航海日誌において自らを頂点とする新たな序列を明らかにする。

“Alexander Smollett, master; David Livesey, ship’s doctor; Abraham Gray, carpenter’s mate; John Trelawney, owner; John Hunter, and Richard Joyce, owner’s servants, landsmen [. . .] Thomas Redruth, owner’s servant, landsman, shot by the mutineers, James Hawkins, cabin-boy..” (98).

ここでスモレットが念頭においているのは一人前の乗組員と（船長と船医と船大工）それ以外の人々との区別であり、彼の権力が船長というその地位から生じるものであることが分かる。そして、それはシルヴァーも認めていたとおり、

船の進路を決めることができる唯一の人物としての実質的役割に基盤を置くものでもある。つまり、スモレットの力は何よりも操船術という彼自身の技に根拠づけられているのである。彼は、論理的な思考力と緊急時における指導力を示して、船を降りたのちも主導権を握り続け、嘗では激しい砲撃にさらされながらも国旗を降ろそうとしない。そこに見られるのは理性的な判断力と熱い愛国心であり、この意味で彼もまたバラントイン的英雄像に直結する。そのような船長に対してはリヴジーも兜を脱いでいる(102)。実際、旅の最初に “I don't like treasure voyage on any account [ . . . ].” (48) と明言していたことから分かりますとおり、欲望に害されていない唯一の人物がこのスモレットだったのだ。

このように英雄性が再三にわたって強調されるスモレットであるが、ジムの評価は決して好意的ではない。秩序と公平さを重んじるその姿勢が杓子定規なまでに厳格なため、ジムは “I [ . . . ] hated the captain the captain deeply.” (51) と、船長を憎むようにさえなる。トレローニが体現していたのが強健な身体と明朗さであるとするれば、スモレットの場合は強健な身体と謹直さであろう。そして、ジムは前者を軽佻浮薄だとして退けたように、後者をわからずやの石頭として退けてしまうのである。このように、バラントインやキングストーンが理想化していた男性性は、『宝島』において二極化されて表現されているが、両方が等しく否定されていることになる。

では、紳士側の第三の人物リヴジーはどのような人物なのだろうか。彼は医師であるという点で、船長と同じく自らの知識と技によってその地位をえている。しかし地主や船長ほどの大男ではなく、白粉をはたいた鬢に象徴されるように、身体的特徴はその身なりや物腰の立派さ、優雅さで表現されている。このようなりヴジーが権力を握るいきさつについては、海賊との交渉を終えたのち、好奇心に駆られて持ち場を離れていた面々をスモレットが叱りとばすシーンが重要な伏線になっている。

“Quarters!” he roared. And then, as we all slunk back to our places, “Gray,” he said, “I’ll put your name in the log; you’ve stood by your duty like a seaman. Mr. Trelawney, I’m surprised at you, sir. Doctor, I thought you had worn the king’s coat! If that was how you served at Fontenoy, sir, you’d have been better in your berth.” (109)

スモレットが最高権力を手にした瞬間でもあるこの場面で、注目すべきは、最

も激しく攻撃されているのがリヴジーだという点である。しかも、船長は、わざわざリヴジーが自慢していた軍人経験を引き合いに出して彼を侮辱している。<sup>19</sup> そしてこの直後、海賊の攻撃を受けて背中と足に負傷したスモレットはリヴジーの手で権力の座を追われることになる。そもそも、スモレットの傷の状況について、ジムは、“not dangerous” “No organ was fatally injured” “not badly” (117) と繰り返している。にもかかわらず、スモレットが指揮権を手放さねばならなかったのは、医師であるリヴジーが絶対安静を命じたからなのである。このいきさつをジムは次のように説明する。

He was sure to recover, the doctor said, but, in the meantime and for weeks to come, he must not walk nor move his arm, nor so much as speak when he could help it. (117)

このように、「なるべく口を利くな」という医師の命令によって声を奪われたスモレットは、かつてのライバルトレローニに付き添われて表舞台から姿を消すことになる。こうして紳士側の指揮権はリヴジーの手に握られることになるのである。<sup>20</sup>

V

以上のように、『宝島』では紳士と目される人物ですら帝国の建設者としての男性像を理想化する役目を果たしていない上に、シルヴァーという社会規範からの逸脱者が英雄視されている。ここから、19世紀の冒険小説における『宝島』の特異な位置づけが明らかになる。つまり、スティーブンソンの作品は、ヴィクトリア朝の冒険小説が理想化してきた男性性を攪乱し、そうすることで帝国の教具として機能していた少年向け冒険小説の慣行から逸脱しているのだ。

Paul Zweig は、文学における英雄像の変遷をたどった著書の中で、道徳的英雄とは異なる、反逆者あるいは逸脱者としての「冒険者」を定義している。

From the viewpoint of the common good, these men are worthless. Apparently that is why we are thrilled by their acts. They stand outside the categories of duty and obligation. They give us the spectacle of self-determined man who defends not us, but himself [. . .] their loyalty is directed toward the turns and chances of their own destinies. We call such a hero an *adventurer*. (36 italicized in the text)



「逃避の芸術家」としての「冒険者」は、「都市の城壁に穴を穿つ」のであって、そのような冒険者を目にした我々は、「たとえ自分には不可能であろうとも、誰かにはそれが可能なのだと気づくことで呼吸が楽になる」(60)と、ツヴァイクはいう。『宝島』のシルヴァーが中世騎士やピカロなどから引き継がれた、この「冒険者」としての性質をもっていることはいうまでもない。そして、そのような反逆者としての英雄を、魅力ある存在として活かしたところに、反体制的冒険小説としての『宝島』の本質が顕在化していると言えよう。

もちろん、冒険小説の歴史における『宝島』の真価をさらに探るためには、「冒険者」たるシルヴァーが穴を穿った都市の「城壁の正体」を探ることが必要となろう。実はこの問題は、本稿においては触れなかったリヴジーとシルヴァーの対決及び最終的勝者が誰なのかという点や、主体性を限りなく矮小化されながらも大人の行動を規定していくジムの複雑性などと、密接な関係を持っているのである。しかし、これらの点については別稿に譲ることとする。

本稿は、2000年11月6日、日本イギリス児童文学学会第30回大会（於：川村学園女子大学）において口頭発表した原稿の一部に加筆・修正したものである。

#### 註

- 1 記録行為自体はジムの成人後に行われているが、その語りには大人と子どもの声と視点が共存している。例えば Barbara Wall は “In Jim, man and boys are separate; and although the boy’s consciousness appears to be dominant, it is the man’s preoccupations which give the book its depth.” (70) と指摘している。
- 2 この点については、実際に宝を探し当て、掘り出した元海賊 Ben Gunn も同じである。宝の行方に重要な役割を担うにもかかわらず、独力では宝を持ち帰ることができず、わずかな分配金しか手にすることができない。ジムが “What it was, whether bear, or man or monkey, I could in no wise to tell.” (79) と描写する、この限りなく野蛮人化したロビンソンの人物は、子どものジムとともに成人男性によって支配され、従属化される主体なのである。
- 3 *The Swiss Family Robinson* (1812-13), *Masterman Ready* (1841-42), *The Little Savage* (1848-49) など、例は枚挙に暇がない。*The Coral Island* (1858)のように、大人の登場人物を極力排した作品においてすら、三人の主人公の中で最年長の青年を理想的人物として描くことで、語り手の少年の目を通して他者の英雄性を描写している。
- 4 Joseph Campbell は英雄を以下のように定義する。 “A Hero ventures forth from the world of common day into a region of supernatural wonder: fabulous

*forces are there encountered and a decisive victory is won: the hero comes back from this mysterious adventure with the power to bestow boons on his fellow man.*" (30 italicized in the text)

- 5 海賊は分限紳士 (gentleman of fortune) と呼ばれる(58)。
- 6 Marcus Rediker によれば、船長が船員の総意によって選出されていたことも含めて、18 世紀の海賊社会で数多くの平等主義精神が見られたことは事実である (261-62)。
- 7 バランタインの *The Coral Island* (1857)、*Gascoyne, the Sandal-wood Trader* (1865)、*The Madman and the Pirates* (1885)、キングストンの *Peter the Whaler* (1851)、*The Pirates of the Mediterranean*(1856)などは好例である。なお、*The Madman and the Pirates* が、『宝島』とほぼ同時期に出版されていることは注目に値する。
- 8 ジョンソンの著作については、スティーブソンが “My First Novel” と題したエッセイの中で『宝島』との関連を明言している (198)。
- 9 David Cordingly は、海賊がこのように英雄視された理由として、エキゾチックな場所での活動や反体制的気質などをあげている (242)。
- 10 Hans Turley は次のように説明する。 “A buccaneer, finally was a hero precisely because he fought ‘great wars which have been raised for a principle’ was an expression of hatred of Catholics [. . .] . Another ‘principle’ was economic. [. . .] By 1915 all these ‘principles’ had become confused with the completely criminal exploits of the ‘golden-Age’ pirates.” (35-36)。
- 11 これは『宝島』に登場する海賊全員に言えることである。トレローニの空虚な賛美 (31) を考えあわせても、作品中で度々使われる “Buccaneer” という呼称が、紳士・海賊両陣営の道徳的曖昧性を強調する仕掛であることは明白だ。
- 12 Thomas Arnold がラグビー校の校長に就任したのが 1828 年、Robert Baden-Powel が *Aids to Scouting* を出版したのが 1899 年である (ボーイスカウト団自体の創設は 1908 年)。
- 13 John R. Gillis はこの変化について次のように記している。 “Sport was taking over many of the functions of the rite of passage once reserved to Latin language study [. . .] . There was an important social change involved in substitution, however. The model of the earlier Latin school was the monastery; the ideal of the public school was increasingly military.” (111) なお、パブリック・スクールの変化とそこで理想化される男性性については、George Mosse の論文 (46-52) にも詳しい。
- 14 キプリングが描いた学校は、彼自身が 1878 年から 5 年間在籍した The United Service Collage をモデルにしている。それは軍人養成を念頭において創設された比較的新しいパブリック・スクールであった。このような特殊な学校が開設され、そこを描いた作品が人気を博したという事実もまた、学校に対する社会的認識の変化を反映しているとみなせるだろう。
- 15 詳細は Isabel Quigly の *The Heirs of Tom Brown* (1982) と P. W. Musgrave

- の *From Brown to Bunter* (1985) を参照のこと。両者とも学校物語についての体系的な研究書であるが、「キリスト教徒の紳士」養育機関を描いた作品としてヒューズ作品を、「帝国の行政官」養成機関を描いた作品としてキプリング作品をとりあげ、社会的・文化的背景についても考察している。
- 16 バラントイン作品の性質と英雄像に関しては Stuart Hannabuss の論文に詳しい。また、キングストン作品については J. S. Bratton がその著作において“Evangelical into Imperialist: W. H. G. Kingston’s Books for Boys”という章題のもとに詳述している (115-133)。
- 17 なお、バラントインやキングストンの作品が大衆へ浸透した過程には、日曜学校で褒美として盛んに配られたことも考慮すべきであろう。
- 18 キリスト教精神に則った男らしさの概念がパブリック・スクールのみならず、少年のための様々な民間組織や文学を通じて中産階級から労働者階級へと広まっていった様については John Springhall の論文に詳しい。但し彼は、ボーイ・スカウトに先だって 1883 年に創設された少年隊 (Boy’s Brigade) の役割を重視している。
- 19 スモレットのこの叱責は “I was not new to violent death—I have served his Royal Highness the Duke of Cumberland, and got a wound myself at Fontenoy [ . . . ] It is something to have been an old soldier [ . . . ]. ” (88) と、自らの軍人経験を誇らしげに語っていたリヴジーの言葉に呼応している。
- 20 このような紳士側の権力交替劇には、正当化される権力基盤の変化（継承財産から個人の能力や技術力へ）や、理想化される資質の変化（体力重視から知力重視へ）が読み取れる。これらは富裕なエンジニアの息子たるスティーヴンソン自身が属した社会階層意識を正当化するものであって、反体制的な『宝島』の性質と齟齬をきたしている。実は、このような齟齬に体制への順応と反抗の間で揺れ動いた作家自身の立場が表出しているのであるが、この件に関しては紙面の都合上ここでは深くはたちらない。

### 引用文献

- Bratton, J. S. *The Impact of Victorian Children’s Fiction*. London: Croom Helm, Totowa, NJ.: Barnes & Noble, 1981.
- Campbell, Joseph. *The Hero with a Thousand Faces*. Princeton: Princeton UP, 1949.
- Carpenter, Humphrey. *Secret Gardens: The Golden Age of Children’s Literature*. London: George Allen & Unwin, 1985.
- Carpenter, Humphrey and Mari Prichard. *The Oxford Companion to Children’s Literature*. Oxford: Oxford UP, 1984.
- Cordingli, David. *Under the Black Flag: The Romance and the Reality of Life among the Pirates*. San Diego: Harvest Book, 1995.
- Fisher, Margery. *The Bright Face of Danger: An Exploration of the Adventure*

- Story*. London: Hodder and Stoughton, 1986.
- Gillis, John R. *Youth and History: Tradition and Change in European Age Relations, 1770 - Present*. Expanded Student ed. New York: Academic Press, 1981.
- Hannabuss, Stuart. "Ballantyne's Massage of Empire." Jeffrey Richards ed. *Imperialism and Juvenile Literature*. Manchester, Eng.: Manchester UP, 1989. 53-71.
- Mosse, George L. *The Image of Man: The Creation of Modern Masculinity*. New York: Oxford UP, 1996.
- Musgrave, P. W. *From Brown to Bunter: The Life and Death of the School Story*. London: Roytledge & Kegan Paul, 1985.
- Quigly, Isabel. *The Heirs of Tom Brown: The English School Story*. London: Chatto & Windus, 1982.
- Rediker, Marcus. *Between the Devil and the Deep Blue Sea: Merchant Seamen, Pirates, and the Anglo-American Maritime World, 1700-1750*. Cambridge, Eng.: Cambridge UP, 1987.
- Springhall, John. "Building Character in the British Boy: The Attempt to Extend Christian Manliness to Working-class Adolescents, 1880-1914." J. A. Mangan and James Walvin eds. *Manliness and Morality: Middle-class Masculinity in Britain and America*. Manchester, Eng.: Manchester UP, 1987. 52-74.
- Stevenson, Robert Louis. "My First Book." 1894. *Treasure Island*. New York: Penguin, 1999. 191-98.
- . *Treasure Island*. 1883. New York: Penguin, 1999.
- Townsend, John Rowe. *Written for Children: An Outline of English-Language Children's Literature*. 6th ed. Lanham, MD.: Scarecrow. 1996.
- Turley, Hans. *Rum, Sodomy, and the Lash: Piracy, Sexuality, and Masculine Identity*. New York: New York UP, 1999.
- Wall, Barbara. *The Narrator's Voice: The Dilemma of Children's Fiction*. London: Macmillan, 1991.
- Zwieg, Paul. *The Adventurer*. Princeton: Princeton UP, 1963.